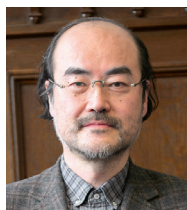


広告ミュージアムのためのアーカイブシステム「デジハブ」の開発



高野 明彦

国立情報学研究所コンテンツ科学研究系教授

プロフィールはp.2を参照

21世紀型の広告ミュージアムが備えるべき要件

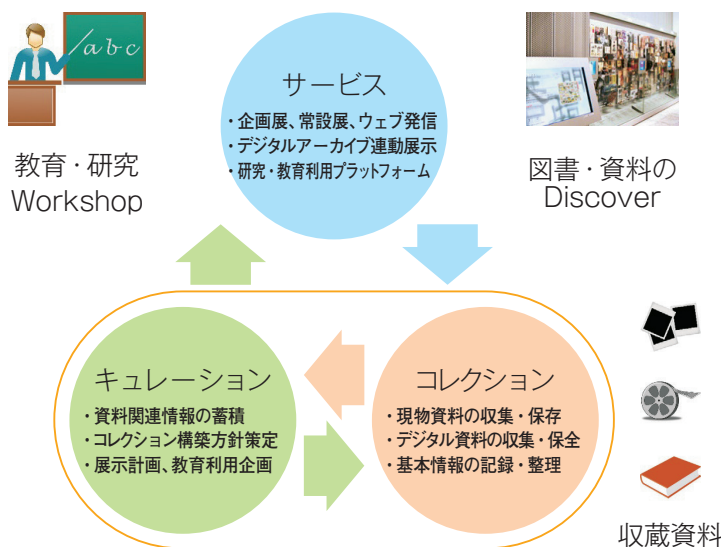
今回、国内随一の広告博物館であるアドミュージアム東京の依頼で、新しいアーカイブシステム「デジハブ」を開発した。システムの基本設計に着手するにあたり、これからの広告ミュージアムに求められる要件について改めて整理した。ここでは、ミュージアムの機能を、コレクション、キュレーション、サービスの3つの要素に分けて整理して【図表1】、それぞれについてアーカイブシステムが果たすべき役割を述べる。

最初の要素のコレクションとは、現物資料の収集・保存という、博物館の最も基本的な機能である。アドミュージアム東京の場合、古くは江戸時代の看板や錦絵のチラシ、印刷されたポスターや新聞広告など物理的な形のある収蔵品が中心であるが、ラジオやテレビなど新しい広告媒体の誕生に合わせて、収集する広告情報の形態も音声や動画など多様化している。中でもテレビCMは受賞作を中心に43,000点以上を収集していて、コレクションの中核となっている。今のところ、

ウェブ上での広告は収集対象になっていないが、将来これらを加えるためには、ウェブアーカイブ等の技術についても検討する必要がある。

このようにさまざまなメディアの収蔵品について、メディアの違いを超えて情報を一括管理するためには、デジタルアーカイブ技術が役に立つ。個々の収蔵品の受け入れ時に、

【図表1】21世紀型広告ミュージアムに求められる3要素



サムネイルの撮影、音源や映像のデジタル化などを行ってプレビューに役立つデジタル情報を作成する。それに最低限の基本情報を付与して整理することにより、すべての収蔵品を共通の一つのアーカイブシステムに登録して、コレクション全体を統一的に取り扱うことが可能になる。従来は収蔵品を形態やメディアの種類ごとに別々に管理していたため困難だったが、この共通アーカイブシステムによって、メディアの違いを超えたテーマや切り口でコレクション全体をブラウズし、さまざまな条件で絞り込むことが容易に実現できる。

2つ目の要素であるキュレーションとは、ミュージアムが構築・維持すべきコレクションの方向性や範囲を決め、収蔵品相互の関係性を明らかにして、収蔵品の意味をより深く読み解くための関連情報を収集することを含んでいる。このような活動の結果が、充実した常設展示の実現や魅力的な企画展覧会の開催という形で、3つ目の要素であるサービスを支えている。広告関連の文献を収集する広告図書館は、キュレーションのための基本資料を提供するものであり、これらを活用して個々の収蔵品についての情報を充実させていくことは、コレクションの価値を高めることにつながる。これからのキュレーション環境にとって、コレクション全体が登録されたデジタルアーカイブを利用できることは

必須の条件であるといえる。

ミュージアムに欠かせない3つ目の要素であるサービスとして、従来は常設展や企画展などの展示空間に来館者を受け入れて、展示品についての情報を提供することが中心であった。しかし、膨大なコレクションを収蔵・保存するミュージアムにとって、展覧会中心のサービスだけではコレクションの価値を十分に生かしているとはいえない。電子的メディアで記録された情報については、デジタルアーカイブを活用した展示企画やウェブ上での発信などが可能であり、また、コレクションの一部を大学等の教育現場で直接活用することも考えられる。

広告アーカイブシステム「デジハブ」が 目指すビジョン

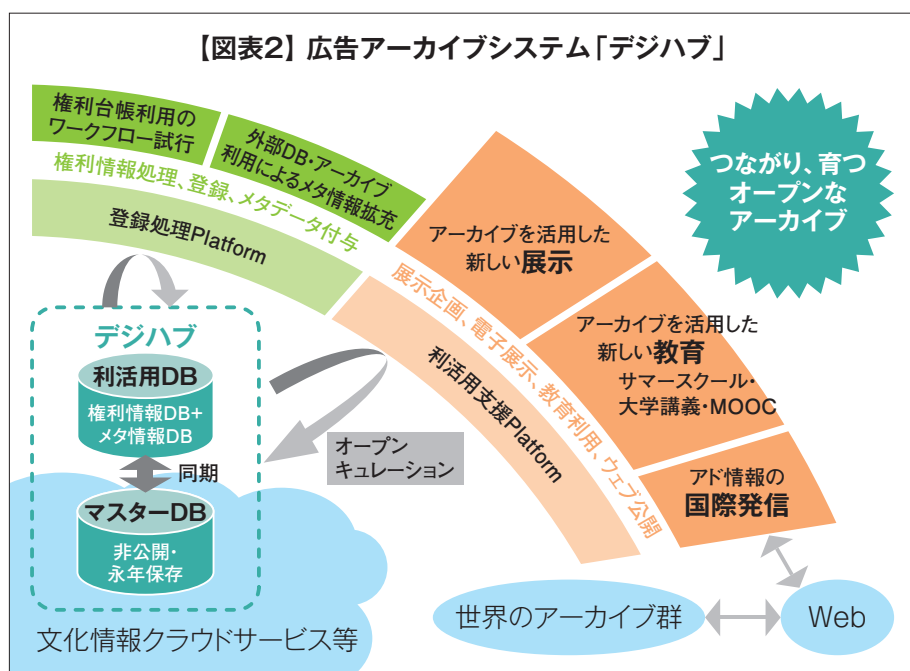
前項の考察を踏まえて、21世紀のミュージアムに求められる最も重要な機能とは、メディアの違いを超えて登録管理可能なデジタルアーカイブ技術を活用して、コレクション全体の価値を高めるためのキュレーションが十分に行われ、それが新しい展示や研究・教育の現場で活用できるプラットフォームとして提供されることである。

実際にミュージアムの外で教育利用するためには著作権等に関する検討が必要となるが、権利に関する情報も併

せてアーカイブシステムで管理することにより、多くの関係者が安心してミュージアムのコンテンツを利用できるプラットフォームへと進化させられると考えられる。また、キュレーションの作業については、これまではミュージアム側がすべてを引き受ける形で進められてきたが、アーカイブシステムの一部を外部の研究者や教育利用者に開いていくことにより、さらに専門性の高い多くの人々からのフィードバックを取り込むことが可能となり、より正確で深いメタデータが整備されると期待できる。このようなキュレーションのためのプラットフォーム提供は重要な課題である。

アドミュージアム東京の新しいアー

【図表2】 広告アーカイブシステム「デジハブ」



カイクシステム「デジハブ」の構成と実現すべきビジョンを【図表2】のようにまとめた。すなわち、登録する収藏品に関するデジタル一次情報は一元的に管理して、システムトラブルに備えてクラウド上に複数のバックアップを持つなど、信頼性の高い構成としてデジタル情報の保全を図る。例えば、数十年後でも同一IDでアクセスできることを保証する。権利情報やメタ情報については利活用データベース(DB)にも置いて、それを活用して権利情報の登録のためのプラットフォームと利活用支援のためのプラットフォームを構築する。権利情報の登録プラットフォームは、当面内部スタッフが収藏品の権利情報管理に利用する。利活用支援プラットフォームは、サービス提供者だけでなく教育等に活用しているサービス利用者からの情報も適切に取り込めるように工夫する。基本的なメタデータの誤りについてフィードバックをもらうことは当然だが、それに加えて、教育活用等を通じて生まれる新しい見方やグルーピングなどの情報を柔軟にフィードバックできる仕組みを用意する。

今後、権利情報の整理が進むにつれて、利活用支援プラットフォーム上での提供可能範囲が拡大して、展示利用から教育利用、最終的にはウェブ上での公開まで可能になると期待できる。その過程で利用者からは適宜フィードバックが返されて、メタデータの精度が高まり、関連情報へのリンクなどが追加される。このようにコレクションの利用を広げながら、多くの利用者からのフィードバックを活用してキュレーションを進める方法を「オープンキュレーション」と呼びたい。デジハブは、アドミュージ엄東京を広告情報についての世界初のオープンキュレーション拠点とすべく構想された。

デジハブが提供するBOX機能による柔軟なキュレーション

デジハブでは、コレクション管理機能とキュレーション機能をバランスよく提供するために、柔軟なキュレーションを可能にするBOX機能を提供している。コレクション管理については、通常のデジタルアーカイブシステムと同様に、収藏品の分類に応じて記録すべきメタデータのスキームを定義して、それらをすべて記録できるデータベース(RDB)を用意している。フィールドを指定したキーワード検索はもちろん、検索結果をさらに時代や商品分類、メディア種別など

で絞り込むファセット検索などもサポートしている。

デジハブのユニークな特徴は、これら基本情報のDBとはまったく別に(パラレルに)BOX機能を提供していることにある。【図表3】にBOXの基本機能を示すが、これらはミュージアムの収蔵庫などでよく使われている中性紙保存箱やそれらが収納されている棚の機能を抽象化して考え出したものである。

【図表3】BOXが提供する基本機能

■なんでも入れられる「箱」

- ・基本資料は、どんなものでも何個でも入れられる。
- ・基本資料以外の文書、論文、企画展カタログなども入れられる。
- ・他のBOXも入れることができる。入れ子にできる。

■作った意図を記録する「箱」

- ・BOXの中身について説明するメタ情報を付与できる。
- ・中身の資料ごとにメモを付けたり、並び順を決められる。

■中身を手がかりに探し出せる「箱」

- ・メタ情報や中身の資料の条件を指定して、該当するBOXを検索。

■ほかの人と共有する単位としての「箱」

- ・貸し出し、修繕、教育利用、資料の取り置き、検索結果の共有。
- ・展覧会記録、展示計画、新規資料受け入れ。

BOXの全体=多様な軸で整理された資料収蔵庫

BOXにはなんでも入れられる。収藏品DBに登録されている収藏品は何個でも入れられるし、DBにない論文や展覧会カタログも入れられる。入れ子関係が循環しない限り、別のBOXも自由に入れられる。BOXは作成者の意図を記録する仕組みとしてデザインしているので、BOXのメタデータとして、作成目的や中身についての情報を付与できる。BOXを使って仮想ギャラリーを表現できるように、中身の資料の並び順を指定したり、個々の収藏品にメモを付けられる。

このようにBOXは、ほかの人と共有する情報の表現として、十分な表現力と柔軟さを備えている。アドミュージ엄東京の業務のうち、デジハブの収藏品情報が必要となるのは、資料の貸出、修繕、教育利用、展示計画、展覧会の記録、新規資料受け入れなど多様だが、すべてBOXに必要な情報を入れて管理できる。これらの業務の過去の履歴もBOXとして記録できる。例えば教育利用では、授業で利用した資料群と、その授業で学生が作成したレポート類をまとめて記録するのに最適である。貸出業務では、貸出対象と

なる収蔵品と貸出申請、送付、返却等の各フェーズで発生する書類、貸出先での成果物を一緒に記録しておく。

オープンキュレーションのための新しい資料収蔵庫

こうやって作られ蓄積されるBOXの全体は、多様な軸で整理された新しい資料収蔵庫と考えることができる。資料の貸出記録のBOXに、貸出先で利用されて作成された雑誌記事、論文、展覧会目録などが入れられるようになれば、

【図表4】特定の収蔵品を含むBOX一覧



No.	ボックス名	ボックスタイプ	更新日時	数
1	2011.10.12~2013.05.12開設展示作品	ボックス	2016年05月17日 13時18分	20
2	2012年02月14日・SHIROKAIYA HOLDINGS INC.	貸出図書	2016年05月17日 13時18分	20
3	2012年04月24日・白木屋 Shirokaiya INCORPORATED	貸出図書	2016年05月17日 13時18分	20
4	2012年07月19日・シロキヤインコーポレーテッド	貸出図書	2016年05月17日 13時18分	20
5	2012年08月02日・シロキヤインコーポレーテッド	貸出図書	2016年05月17日 13時18分	20
6	2012年08月07日・シロキヤインコーポレーテッド	貸出図書	2016年05月17日 13時18分	20
7	2013.05.05~常設展示作品	ボックス	2016年05月17日 13時18分	20
8	2013年06月14日・株式会社タカサ	貸出図書	2016年05月17日 13時18分	20
9	2015年度資料貸出リスト (白野作展用) 20150502	ボックス	2016年05月20日 13時29分	20

そこに記録されているのはまさにオープンキュレーションの結果であるといえる。

デジハブが提供するBOXは電子的な情報表現にすぎないので、同じ収蔵品が幾つものBOXで繰り返し使われても構わない。当然、ある収蔵品を指定して、それを含むすべてのBOXを列挙することも可能である。これらは紙の保存箱や物理的な資料収蔵庫にはない便利さである。

【図表4】はBOXの逆引き機能を使って「白木屋店頭美女立姿」という錦絵を含むBOXの一覧を求めたものである。この作品がこれまで繰り返し貸し出され、また常設展示の対象にもなっていたことが一目で確認できる。さらに個々のBOXを開くことにより、この作品と一緒にどのような作品が貸出や展示の対象になったのかをたどることができる。一つの作品を多様なコンテキストで捉え直すことが可能になり、作品に関する理解を深める手がかりが得られると考えられる。

デジハブでは同様に、どの収蔵品からもワンクリックで、それを含むBOX一覧を表示できる。個々のBOXを仮想ギャラリーだと捉えれば、ある作品から出発して、それを展示するギャラリーに入り、そこで一緒に展示されている別の作品の詳細を見て、今度はその作品を含む別のギャラリーへと

移動するというように、次々と仮想ギャラリーをはしごすることもできる。膨大なコレクションの中を、先人たちが意味付けしたグルーピングを参考に、渡り歩くことが可能になり、通常のデジタルアーカイブで得られる検索中心の経験とは一味違う体験が得られると期待できる。

この収蔵品DBと一体化したBOXの集積こそがデジハブのキュレーション支援、利活用支援プラットフォームの中核である【図表5】。収蔵品DBを利用するすべての活動、各種業務から教育・研究利用までをBOXを使いながら行うことにより、相互に助け合いながらコレクション全体に対するキュレーションが自然に進んでいくと期待している。

【図表5】BOX機能による柔軟なキュレーション

